

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00308

研究課題名(和文) 17～18世紀の京都における「知」の大衆化 - 絵入百科事典を中心として -

研究課題名(英文) The popularisation of 'knowledge' in 17th- and 18th-century Kyoto: Focus on illustrated encyclopaedias

研究代表者

石上 阿希 (Ishigami, Aki)

国際日本文化研究センター・研究部・特任助教

研究者番号：20516819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀から18世紀の京都において刊行された絵とことばで事物を図解した「絵入百科事典」的書物が果たした「知」の大衆化を明らかにした。第一に日本最初の絵入百科事典である『訓蒙図彙』について、出版の背景・典拠と近代まで続く影響を考察した。第二に人物の属性毎にデザインを分類した小袖雛形本『正徳ひな形』の翻刻・注釈を行い、京都における色や染織技法、意匠を具体的に検証し、また服飾と文学、出版文化と風俗の関係性といった文化的背景も明らかにした。第三に人物、仏像、女性風俗、武具、建築などの「訓蒙図彙もの」書物の翻刻や英訳、メタデータ作成を行い、「近世絵入百科事典データベース」として公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、絵と言葉を備えた「絵入百科事典」的書物が、教養や情報を把握し、固定化するために重要な役割を果たしたものと捉え、これらの書物がどのように江戸の「知」を支える裾野を拡げていったのか、人物図、着物、享受、異国との文化交流などの視点から考察を行った。また、これらの書物の多くが未翻刻の状況であることから、資料の翻刻作業を進め、同時にそれをデータベースとして発信した。古典籍・浮世絵のオープンデータ化が急速に進む現在において、書物という形式をデータベースに代えて、近世期の絵入百科事典を現代の読者につなげることを試みた。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the popularisation of 'knowledge' achieved by the 'illustrated encyclopaedia' style books published in Kyoto in the 17th and 18th centuries. First, I examined the background and sources of publication of the first illustrated encyclopaedia in Japan, the Kinmo-zui, and its continuing influence up to the modern era. Secondly, our study grope reprinted and annotated the Shotoku hiinagata, a book of kosode hinagata that classified designs according to the attributes of figures, and specifically examined the colours, dyeing techniques and designs in Kyoto. We also clarified the cultural background, including the relationship between clothing and literature, publishing culture and customs. Thirdly, we reprinted, translated into English and created metadata for illustrated encyclopaedias on figures, Buddhist statues, women's customs, armour and architecture, and made them available as the "Database of Early Modern Illustrated Encyclopaedias".

研究分野：日本近世文化史

キーワード：出版史 デジタルアーカイブ データベース 京都 西川祐信 絵入百科事典 雛形本 視覚文化

1. 研究開始当初の背景

西川祐信は、江戸中期に京都を拠点として活躍した浮世絵師である。祐信は実に様々な媒体において作品を制作していた。その内容は、風俗画から教訓絵本や着物雛形本、浮世草子の挿絵や画論、艶本など多岐に亘る。祐信の周囲を見渡すと、そこには当時の上方における知識人や絵師、版元などのネットワークが浮かび上がってくる。

このように祐信の研究を進めてきた中で、研究代表者は特に祐信の絵本が古典の大衆化を進め、その結果江戸の浮世絵師たちが古典を題材に多様な錦絵や春画を生み出したことを明らかにした。また、祐信があらゆる階層の人物を網羅的に扱い、職業や身分毎に分類した絵本や春本を多数制作した源流に、森羅万象の事物を体系的に分類し、視覚化した絵入百科事典『訓蒙図彙』があったことを検証した。

『訓蒙図彙』は、京都の儒学者中村惕斎によって編纂された絵入百科事典である【図1】。本書は子ども用の教育書として作られた。本書は、その後元禄8年(1695)、寛政元年(1789)に増補・改訂版が刊行され、時代を超えて長く読み継がれていき、南方熊楠なども愛読した。また、ケンペルやシーボルトなど本書を本国に持ち帰った外国人にとっても日本の事物や言葉を学ぶ重要な書物であったといえる。



【図1】『訓蒙図彙』畜獣 国会図書館蔵



【図2】『正徳ひな形』東京藝術大学図書館蔵
武家の女性の姿絵と小袖雛形

その後、『武具訓蒙図彙』や『仏像図彙』など細分化された事物を図解する「訓蒙図彙もの」と呼ばれる書物が多数出版された。祐信は、公家や武家、農民など諸階層の人物を分けし、それぞれの名称とその風俗を描きとめたが、それらの書物も「訓蒙図彙もの」の流れを汲むものである。例えば『正徳ひな形』では、着物の技法や図案を階層別に分けて、それぞれにふさわしい模様や技法を図と文で事細かに指示している【図2】。

このように絵と言葉を備えた書物は、教養や情報を把握し、固定化するために重要な役割を果たした。しかし、これらの資料は文学史や美術史、教育史の研究視座から外されたまま、十分な研究が行われてきたとは言いがたい。例えば『訓蒙図彙』、『正徳ひな形』ともに全文の翻刻すらない状況である。

そこで、本研究ではこれらの絵入百科事典的書物が、どのように江戸の「知」を支える裾野を拡げていったのかという「問い」をたて、人物図、着物、享受、異国との文化交流などの視点から考察を行う。

また、本研究のもう一つの背景として、デジタルアーカイブが挙げられる。2000年代後半から、国内外の大学、博物館、図書館による日本古典籍のオープンデータ化が本格的に始まり、特にここ数年では国会図書館や国文学研究資料館などが数十万点単位でのデジタル化計画を進めている。研究代表者はそれらのデータを利用して、「訓蒙図彙もの」を検索出来る「近世絵入百科事典データベース」の試作版を2017年に公開した。本研究では、資料の翻刻作業と同時にそれをデータベースとして発信する。いわば、書物という形式をデータベースに代えて、近世期の絵入百科事典を現代の読者につなげることを試みる。

2. 研究の目的

本研究では、17世紀から18世紀の京都において刊行された絵とことばで事物を図解した「絵入百科事典」的書物が果たした「知」の大衆化を明らかにする。

(1) 儒学者中村惕斎が編纂した『訓蒙図彙』(寛文6年[1666]序)について、惕斎がいかに学問知を収集・分類し、初学者向けの書物として作り上げたのか。また、近代にまで続くその影響を考える。

(2) 浮世絵師西川祐信が描いた着物の図案集『正徳ひな形』(正徳3年[1713]刊)について、古典文学、教養のデザイン化の過程や着物を公家や商人といった階層毎に分けた祐信の思想を検証する。

(3) 『訓蒙図彙』および、それに類する絵入百科事典的書物の翻刻とデジタルアーカイブ化を行い、データベースとして国内外に広く発信、共有する。

3. 研究の方法

(1) 『訓蒙図彙』および「訓蒙図彙もの」の研究

『訓蒙図彙』は初学者向けの書物として制作されたが、享受者層は制作側の意図を超えて、子ども、外国人、大名などの知識層など広範囲に亘る。その享受の多様性を追うことで、絵と言葉を備えた書物が、時代や地理を超えて「知」を伝達していく様相を明らかにする。

① 年2回程度の共同研究会を開催

② 2017年に行った国際シンポジウム「書物にみる絵とことばの350年」、及び研究会での各発表を基にした論文集の刊行

③ 『訓蒙図彙』をテーマとした単著の刊行

(2) 『正徳ひな形』研究

研究代表者は2013年より服飾史研究の加茂瑞穂氏とともに『正徳ひな形』の研究会を月1回開催してきた。本研究会では、序文・跋文、全96図の雛形図、紋尽の翻刻、語釈を行っている。これによって、祐信が制作した着物の雛形本(模様の見本帳)が、文学作品から受けた影響を指摘し、服飾と文学、出版文化と風俗の関係性を明らかにする。また階級や性別による模様の描き分けに着目し、同時代の公家や武士、歌舞伎役者、遊女、町人が実際に用いていた衣裳と比較することで都市文化への繋がりを考察する。さらに、江戸で出版された雛形本への影響を指摘し、上方から江戸への情報伝達、文化流入について考察する。

① 女性、着物に関する展覧会の開催

② 『正徳ひな形』の翻刻・語釈と研究会メンバーによる論文を一冊にまとめた研究書の刊行

③ 『正徳ひな形』の翻刻・語釈・関連画像を検索出来るデータベースの構築。IIIF (International Image Interoperability Framework)対応

- (3)「近世期絵入百科事典 DB」試作版の改装、「西川祐信作品総合作品 DB」の増補・改訂
人物、仏像、女性風俗、武具、建築などの「訓蒙図彙もの」の翻刻、及び祐信作品の調査を行い、
上記 2 つのデータベースの増補・改訂を行う。

4. 研究成果

(1)『訓蒙図彙』および「訓蒙図彙もの」の研究

- ・2019 年度、絵入百科事典研究会を開催(全 2 回)
- ・2020 年度、石上阿希・山田奨治編『文化・情報の結節点としての図像—絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏』(晃洋書房) 出版
- ・2020 年度、単著『江戸のことは絵事典：『訓蒙図彙』の世界』(KADOKAWA) 出版

個人研究としては、『訓蒙図彙』について①作品成立の過程、②掲載項目の翻刻・注釈・典拠、
③「訓蒙図彙もの」の体系化、④近代までの受容について検証・考察を行い、単著をまとめた。

また、シンポジウム・共同研究会の開催によって、研究の視座が拡張し、『訓蒙図彙』をはじめとした絵入百科事典的書物が西洋・中国・日本の文化・情報交流や近世期から現代への知識の継承に果たした役割を明らかにすることができた。本研究の成果発信により、百科全書・百科事典の国際共同研究への参加が呼びかけられるなど、今後はさらにテーマを深化させて考察していく計画も進めている。

(2)『正徳ひな形』研究

- ・2018～2020 年度、月 1 回雛形本研究会開催
- ・2019 年度、渋谷区立松濤美術館にて「女・おんな・オンナ～浮世絵にみる女のくらし」展開催
- ・2021 年度、国際学会 EAJS2021(16th International Conference of the European Association for Japanese Studies)でパネル発表「Deciphering Edo Period Designs: The Social and Cultural Context of Early Modern and Modern Kimono Pattern Books」(発表者：石上阿希、加茂瑞穂、ミシェルキューン平野)
- ・2021 年度、石上阿希・加茂瑞穂編『西川祐信『正徳ひな形』—影印・注釈・研究—』(臨川書店) 出版
- ・2021 年度、オンラインシンポジウム「小袖をめぐる言葉と形—西川祐信『正徳ひな形』を読む—」開催

『正徳ひな形』各図の注釈によって、江戸中期の京都における染織技術や色、意匠について、同時代の文学や辞書、絵画資料や風俗などと付き合わせながら詳細に検討することができた。「小色」や「曙染」など実際にどのような技法なのか明確ではなかった用語についても雛形の事例を挙げて検証し、現段階での見解として提示した。また、雛形本を当時の階層意識や都市風俗、版本による教養・知識の普及などを知る重要な書物として捉え、図案の背景にある文化の読解を行った。シンポジウムでは、研究者だけではなく、株式会社千總からもパネリストとして参加してもらい、近世期の出版物と現代の着物制作の現場をつなげて考察する試みも行った。

(3)「近世期絵入百科事典 DB」試作版の改装、「西川祐信作品総合作品 DB」の増補・改訂

『訓蒙図彙』をはじめ、未翻刻の絵入百科事典関連資料 29 点の翻刻、メタデータ作成、画像処理を行った。2019 年度には、『訓蒙図彙』の英訳も完了した。この他、国際日本文化研究センターの「古事類苑本文データベース」との接続を完了し、コンテンツの拡充を図った。また、改装版の構築もすすめ、2022 年 4 月に正式版として公開を開始した。正式版では IIIF ビューアを用いた画像比較機能や掲載書目の解題の追加、操作性の向上などを行った。本データベースは、『正徳ひな形』の注釈作業でも活用しており、その有用性は確認済みである。今後は近世文学や絵画の作品研究だけではなく、博物学や芸能史、語学史、意匠史など様々な分野の研究で使用されることが見込まれる。

本研究はそれぞれ、論文集や単著、データベースの公開といった形で研究者向けに成果発信を行ってきたが、同時に展覧会や一般向け講座も開催し、社会へ開いていく発信も積極的に行った。引き続き一般向け講座などを続けながらデータベースの活用などを促し、古典籍や浮世絵と社会をつなげる活動を行っていく計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石上 阿希	4. 巻 15
2. 論文標題 図像と言葉で調べる：「近世絵入百科事典データベース」の構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大正イマジュリィ	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石上 阿希	4. 巻 0
2. 論文標題 『訓蒙図彙』考序論：絵入百科事典データベース構築とともに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南太平洋から見る日本研究：歴史、政治、文学、芸術	6. 最初と最後の頁 69～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15055/00006874	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Aki Ishigami
2. 発表標題 Kimono Pattern Books as Merchandise: The Innovation and Universality of the Shotoku Hinagata
3. 学会等名 EAJS2021 Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石上 阿希、山田 奨治	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 146
3. 書名 文化・情報の結節点としての図像	

1. 著者名 石上 阿希	4. 発行年 2021年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 352
3. 書名 江戸のことは絵事典 『訓蒙図彙』の世界	

1. 著者名 石上 阿希、加茂 瑞穂	4. 発行年 2022年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 464
3. 書名 西川祐信 『正徳ひな形 影印・注釈・研究 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

近世絵入百科事典データベース https://kutsukake.nichibun.ac.jp/EHJ/ 西川祐信作品総合データベース http://sukenobu.net/ 文化・情報の結節点としての図像 http://zuzou.nichibun.ac.jp/ 西川祐信作品総合データベース http://sukenobu.net/

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

フランス	パリ・ディドロ大学			
エジプト	カイロ大学			
セルビア	ベオグラド大学			